

イズミノオト



関 朋 岳

ヴァイオリン

第16回東京音楽コンクール弦楽部門にて優勝。その他数々のコンクールにて入賞、優勝を果たす。これまでに日本フィルハーモニー交響楽団、東京フィルハーモニー交響楽団、東京フィルハーモニー交響楽団、東京交響楽団等と共演。現在、東京音楽大学アーチストディプロマコースに特別特待奨学生として在籍（株日本ヴァイオリンより名器特別貸与を受けている）。



村松 龍

ヴィオラ

東京音楽大学付属高校を経て同大学卒業。1995年第49回全日本学生音楽コンクール東京大会小学生の部第2位。2003年第4回大阪国際コンクール高校の部3位1位、2位なし。2007年東京音楽大学コンクール第1位。沖縄国際音楽祭、東京・春音楽祭、セイジョウワ松本フスバルなどに参加。NHK交響楽団アカデミーを経て、現在NHK交響楽団次席ピチフ奏者。



吉岡 知広

チェロ・コーディネーター

仙台市泉区出身。桐朋女子高校音楽科（我子）を経て桐朋学園大学音楽部門を卒業。その後ライプツィヒ音楽演劇大学大学院に在学するとともにライプツィヒゲヴァントハウス管弦楽団と学生契約をし、在籍卒業後は同管弦楽団アカデミーに在籍。第9回ピハホルン・チェロコンクール第4位入賞。チェロを金木博幸、青木十良、藤原真理、毛利伯郎、C・キガリの各氏に室内楽を今井信子氏、東京クアルテットに師事。現在、仙台フィルハーモニー管弦楽団首席チェロ奏者として在籍。



北端 祥人

ピアノ

大阪府出身。第6回仙台国際音楽コンクール第3位など国内外において数多くの賞を受賞している。京都市立芸術大学およびベルリン芸術大学にて研鑽を積む。これまでにソリストとして仙台フィル、東京フィル等と共演。室内楽奏者としても多彩な活動を展開している。東京音楽大学、東京芸術大学附属音楽高等学校の非常勤講師として、後進の指導にあたっている。



川又 明日香

ヴァイオリン

3歳からヴァイオリンを始める。ジュネーヴ州立高等音楽院修士課程ソリストコースを卒業。Breitinger賞を得て修了。第2回仙台国際音楽コンクール審査委員「クラシック倶楽部無言館・折り紙」戦後75年戦没国士追悼音楽館から「NHK英城域放送」記憶つなぎ未来へ等に出演。



今川 結

ヴィオラ

兵庫県出身。兵庫県立西宮高等学校音楽科を経て愛知県立芸術大学を首席卒業。卒業時に桑原賞を受賞。東京藝術大学大学院修士課程修了。NHK交響楽団アカデミー修了。ヴァイオラスベス、東京・音楽祭、北九州国際音楽祭等に出演。これまでに杉山雄、川崎和憲、白木麻弥、百武由紀、中村翔太郎の各氏に師事。



名和 俊

コントラバス

福島県いわき市出身。京都市立芸術大学音楽学部卒業。第1回日本国際コントラバスコンクール第2位を受賞。これまでに村上満志、吉田秀、西口勝の各氏に師事。ドイツベルリンへ留学し、ベルリンフィルハーモニー管弦楽団コントラバス奏者であるエディクソン・ルイス氏の元で研鑽を積み、現在、仙台フィルハーモニー管弦楽団副首席コントラバス奏者、宮城学院女子大学非常勤講師。

「プログラム」

リヒャルト・シュトラウス

5つの小品 作品3

ヴァイオリン・ソナタ 変ホ長調 作品18

オペラ「カプリッチョ」 作品85より 前奏曲（弦楽六重奏版）

メタモルフォーゼン（七つの独奏弦合奏版）



仙台銀行ホール イズミティ21 コンサートシリーズ
Facebook公式ファンクラブ イズミノオトモダチ

コンサートに関する情報など発信していきます。ぜひ“いいね！”してください。

URL: <https://www.facebook.com/izuminootomodachi/>

新型コロナウイルス感染予防のため、ご協力をお願いいたします。



37.5度以上の発熱や咳、咽頭痛、倦怠感、味覚・嗅覚の喪失等の症状がある方は、ご来場をお控えください。



ご来場の際は必ずマスクを着用いただき、こまめな手洗い、手指消毒などの感染予防にご協力ください。



仙 台 銀 行



仙台銀行は、コンサートシリーズ「イズミノオト」への協賛を通して、地域の文化活動を支援しています。

仙台銀行ホール イズミティ21 コンサートシリーズ
イズミノオト 第8回
リヒャルト・シュトラウス 変容ノ前夜

ヴァイオリン
関 朋 岳

ヴィオラ
村松 龍

チェロ
荒井 結

チェロ・コーディネーター
吉岡 知広

ヴィオラ
今川 結

ピアノ
北端 祥人

コントラバス
名和 俊

ヴァイオリン
川又 明日香

Richard Georg Strauss

〔プレイガイド〕 仙台銀行ホール イズミティ21 臨時事務所、日立システムズホール仙台、藤崎、仙台三越、ロソンチケット(Lコード:22756)

〔チケットに関するお問い合わせ〕 仙台市市民文化事業団 総務課 TEL:022-727-1875(平日9:30 ~ 17:00)

〔公演に関するお問い合わせ〕 仙台銀行ホール イズミティ21臨時事務所 TEL:022-375-3101(9:30 ~ 17:00休所日を除く)

〔主催〕公益財団法人仙台市市民文化事業団、kbb東北放送 〔企画制作〕仙台銀行ホール イズミティ21、HAL PLANNING

〔後援〕公益財団法人仙台フィルハーモニー管弦楽団 〔協賛〕仙台銀行

交響詩からオペラへ、
70年を超える創作活動

文・山田治生（音楽評論家）



青年期のシュトラウス

Richard
Georg
Strauss

リヒャルト・シュトラウスは、80歳を超えても「メタモルフォーゼ」や「4つの最後の歌」などの傑作を書き続けていたことで知られているが、彼は、早熟の作曲家でもあった。1864年、ミュンヘン生まれ。彼の父親、フランツ・シュトラウスは、ミュンヘン宮廷歌劇場管弦楽団の首席ホルン奏者として、ワーグナーの「トリスタンとイゾルデ」と「ニルンベルクのマイスター・ジנגラー」の世界初演を吹くだけでなく、パイロイトでのパルジファルの世界初演にも招かれるほどの名手であった。しかし彼自身はアンチ・ワグネリアンであり、モーツァルトなどの古典派音楽を好んだ。一方、母親のヨゼファは、ミュンヘンの屈指のビール醸造業者プショール家の娘であった。

リヒャルトは、父親から音楽の手解きを受けた。モーツァルティアンであったフランツは、新しい音楽には目もくれず、厳格に古典音楽のみを教えようとした。リヒャルトは、幼い頃からピアノとヴァイオリンを習い、よく父のホルンのピアノ伴奏をしたという。作曲は、11歳から宮廷楽長のフリードリヒ・ヴィルヘルム・マイヤーに学んだ。1876年に、「祝典行進曲」を作曲し、それは1881年に作品1として出版された。1880年には早くも、「弦楽四重奏曲イ長調」と「交響曲二短調」を作曲。1881年5月には、「交響曲二短調」がヘルマン・レヴィ指揮ミュンヘン宮廷歌劇場管弦楽団によって初演された。シュトラウスはまだ16歳の若きであった。5つの小品は1881年に作曲され、作品3の番号を付された。

1882年にギムナジウムを卒業したシュトラウスは、ミュンヘン大学哲学科に入る（しかし、音楽活動のため翌年には大学をやめてしまう）。13管楽器のための「セレナード」は、1882年に作曲され、同年11月、ドレスデンで、フランツ・ヴェルナーが指揮する同地の宮廷管弦楽団のメンバーによって初演された。その後、ハンス・フォン・ビューローがこの「セレナード」に注目し、1883年12月にマイニンゲン宮廷管弦楽団で取り上げた。このときはクラリネットにブラームスと親交のあるリヒャルト・ミュールフェルトやホルンにホルン協奏曲第1番の完全な形で初演を吹くことになるグスタフ・ラインホスも参加している。そしてビューローは、1884年のマイニンゲン宮廷管弦楽団のベルリンツアーの際にも「セレナード」を持って行った。「セレナード」をきっかけに、ビューローによって認められたシュトラウスは、1885年にマイニンゲンの宮廷管弦楽団でビューローのアシスタントを務めるようになり、指揮者としての活動を始める。

作曲家としてのキャリアの初期には「チェロ・ソナタ」や「ピアノ四重奏曲」などの室内楽作品の作曲にも取り組んだ。「ヴァイオリン・ソナタ」は初期の室内楽曲創作の最後を締め括る名作。1888年、作曲者24歳のときに書かれたが、後の彼の作品を彷彿とさせ、その早熟ぶりに驚かされる。

1889年には出世作というべき交響詩「ドン・ファン」が初演され、成功を収める。その後「死と変容」（1890）、「ティル・オイレンシュピーゲルの愉快ないたずら」（1895）、「ツアラトゥストラはかく語りき」（1896）、「ドン・キホーテ」（1897）などの交響詩を立て続けに発表。交響詩の作曲家としての名声を獲得した。

その間、オペラは「グントラム」があるのみで、そのオペラは成功を取めたとはいいがたかったが、シュトラウスは1894年の「グントラム」の初演をきっかけにヒロイン役を歌ったパウリーネと結婚することができた。パウリーネは、バイエルンの将軍、アドルフ・デア・アーナの娘であり、出会った頃は新鋭の歌手だった。シュトラウスとの結婚後、彼女は次第に主婦業に専念することになる。気性が激しく、気が強かったことで知られ、シュトラウスの「英雄の生涯」「家庭交響曲」「インテルメッツォ」などの作品に彼女の姿が素材として使われている。

1894年、シュトラウスは、14世紀のドイツに実在したという伝説的ないたずら者であるティル・オイレンシュピーゲルを主人公としたオペラを作曲する構想を持っていたが、最初のオペラ「グントラム」を初演したものの成功を収めることができず、オペラ化を諦め、それを新たに交響詩「ティル・オイレンシュピーゲルの愉快ないたずら」として創作した。「ドン・キホーテ」を書いた頃、シュトラウスは故郷ミュンヘンの宮廷歌劇場の指揮者を務めていた。1898年3月にケルンで「ドン・キホーテ」の初演があった後、同年11月にベルリンの宮廷歌劇場の楽長となる。そして1899年3月にフランクフルトで交響詩の集大成として書いた自伝的な英雄の生

1864年6月11日

ミュンヘンで生まれる。

1881年

交響曲二短調が初演される

1882年

ミュンヘン大学哲学科に入学（しかし、翌年には大学を辞める）。

1885年

マイニンゲンの歌劇場で指揮者としてのキャリアを始める。

1888年

ヴァイオリン・ソナタが初演される。

1889年

ワイマール宮廷劇場の楽長に就任。「ドン・ファン」が初演される。

1894年

最初のオペラ「グントラム」がワイマールで初演される。パウリーネと結婚。

1896年

「ツアラトゥストラはかく語りき」が初演される

1898年

ベルリン宮廷歌劇場の楽長となる。

1899年

「英雄の生涯」が初演される。

1905年

「サロメ」が初演される。

1909年

「エレクトラ」が初演される。

1911年

「ばらの騎士」が初演される。

1919年

シャルクトともにウィーン国立歌劇場の音楽監督となる。「影のない女」が初演される。

1933年

ドイツ帝国音楽局総裁に就任。

1942年

最後のオペラ、「カプリッチョ」が初演される。

1946年

「メタモルフォーゼン」が初演される。

1948年

「4つの最後の歌」を作曲。

1949年9月8日

ドイツのガルミッシュで死去。

涯」を自らの指揮で初演する。「英雄の生涯」によって交響詩を卒業したシュトラウスは、創作の中心にオペラを置くようになる。ただし、オペラの時代においても「家庭交響曲」（1904）や「アルプス交響曲」（1915）を書いている。

指揮者としてのシュトラウスは、マイニンゲン、ミュンヘン、ワイマール、ドレスデンなどの歌劇場で経験を積み、ベルリン宮廷歌劇場の楽長やウィーン国立歌劇場の音楽監督を歴任した。そして、ベルリン・フィル、ウィーン・フィル、ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団などのオーケストラも指揮していた。

1905年、3作目のオペラ、オスカーク・ワイルドの戯曲を原作とする「サロメ」がドレスデン宮廷歌劇場で初演され、サロメの「7つのワールの踊り」やヨカナンの首切りなどでセンセーションを巻き起こす。1905年の「サロメ」と1909年のギリシャ悲劇を原作とした「エレクトラ」の成功により、ワーグナーの後継者と目されるようになったが、「サロメ」や「エレクトラ」のような凶暴で前衛的な音楽がどこに行き着くかは聴衆にとっても不安であった。しかし、シュトラウスは、次の「ばらの騎士」でモーツァルトを彷彿とさせる優美さと20世紀初頭にふさわしいロマンティックでゴージャスな音楽に大きく舵を切ることになる。

「ばらの騎士」は、若い貴族オクタヴィアンと不倫関係にあった元帥夫人が、ゾフィーという若い娘の出現により、オクタヴィアンから身を引くというストーリー。1911年1月、ドレスデン宮廷歌劇場での「ばらの騎士」の初演は、大きな成功を収めた。このオペラの銀のばらの献呈場面、オックスのワルツ、最後の元帥夫人、オクタヴィアン、ゾフィーの三重唱などが人気を博し、その年だけで50回以上の再演があり、この作品を観るためにベルリンからドレスデン行きの特別列車が運行されるほどの大ヒットとなった。

1916年には、新古典主義的な小編成のオーケストラを用いたオペラ「ナクソス島のアリアドネ」を発表。その後も、「影のない女」（1919）、「インテルメッツォ」（1924）、「エジプトのヘレナ」（1928）、「アラベラ」（1933）、「無口な女」（1935）、「平和の一日」（1938）、「ダフネ」（1938）、「ダナエの愛」（初演は作曲者死後の1952年）などのオペラを創作していく。つまりシュトラウスは、作曲家としてのキャリアの前半を交響詩に、後半をオペラにあてたのであった。

1933年には、ドイツを代表する作曲家として、帝国音楽院総裁に任命された。しかし、1935年に、「無口な女」の上演をめぐる、台本作家ユダヤ人であるシュテファン・ツヴァイクとの協力をめぐるナチス政権とのトラブルが原因で、帝国音楽院総裁を辞してしまう。

最後のオペラは「インテルメッツォ」（1942）。台本は高名な指揮者クレメンス・クラウスと作曲者自身が手掛けた。1770年代のパリ近郊の貴族の邸宅を舞台に、「言葉が先か、音楽が先か」がテーマとなっている。弦楽六重奏曲のために書かれた前奏曲は、しばしば単独で、室内楽コンサートなどで演奏される。

80歳を超えてからは、「メタモルフォーゼン」、「オーボエ協奏曲」、「クラリネットとファゴットのための小協奏曲」、「4つの最後の歌」などで最晩年の境地をひらく。

「メタモルフォーゼン」は、1945年に第二次世界大戦によって破壊された故郷ミュンヘンやドイツへの悲しみをこめて作曲された。23の独奏弦楽器、ヴァイオリン10、ヴィオラ、チェロ5、コントラバス3のために書かれたこの作品は、最後の部分に「追悼」と記され、ベートーヴェンの交響曲第3番「英雄」の第2楽章「葬送行進曲」のテーマが引用される。ある意味、祖国へのレクイエムである。

「4つの最後の歌」は、シュトラウスの絶筆といえる作品である。「4つの最後の歌」の最初の3曲は、ヘルマン・ヘッセの詩に音楽が付けられ、第4曲「夕映えのみヨーゼフ・フォン・アイヒェンドルフの詩によるもので、繊細かつ多彩な管弦楽法が魅力的である。この4曲は1948年に作曲されたが、翌1949年9月8日、シュトラウスはこれらの初演を聴くことなく、ドイツのガルミッシュで亡くなってしまう。「4つの最後の歌」の初演は1950年5月22日、ロンドンで、ヴィルヘルム・フルトヴェングラーの指揮、キルステン・フラグスターートの独唱によって行われた。



晩年のシュトラウス（画：マックス・リーバーマン）



パウリーネ・シュトラウス・デア・アーナ